

古フランス語音韻試論

—「ヴェルジ城主の奥方」研究—

篠 木 平 治

Essai de la Phonétique Historique de l'Ancien Français —Etude Linguistique de “La Chastelaine de Vergi”—

Héiji Shinogui

Résumé

La durée vocalique du latin classique était indépendante de la structure syllabique, comme aussi de l'accent. En latin impérial, l'accent d'intensité l'emporte sur l'accent de hauteur et allonge les voyelles toniques, surtout les brèves, tandis que les toniques entravées s'abrègent. En conséquence, l'opposition de durée est neutralisée. De plus, pour des raisons physiologiques, les voyelles brèves sont relativement plus ouvertes et les longues relativement plus fermées. Cette différence se développe en latin populaire et enfin le sentiment de la durée vocalique commence à s'oblitérer. L'opposition de durée est remplacée par l'opposition de timbre. La quantité étymologique est devenue essentiellement phonétique. C'est ce qu'on appelle le bouleversement quantitatif.

L'influence de l'accent dynamique et la différence de la structure syllabique continuent à être décisive sur la transformation française des mots latins. L'action du yod, élément palatal, joue aussi un rôle important en amenant une combinaison ou en produisant souvent une sorte d'entrave, et la nasalisation, influence de consonnes nasales s'exerçant sur les voyelles, toniques ou non, constitue un des caractères de l'évolution phonétique française.

Le texte est écrit en francien, dialecte de langue d'oïl, parlé en Ile-de-France au Moyen Age, et qui est à l'origine du français. Quant aux formes d'autres dialectes, on se contente ici de ne parler concernant l'évolution des voyelles toniques que de celles qui se trouvent dans le texte.

古典ラテン語の母音の長さは音節構造やアクセントの有無に無関係であった。帝政ラテン語期に高さアクセントが次第に強さアクセントに代わり、開音節の強母音、特に短母音が長音化し、閉音節の強母音、特に長母音が短音化すると、その結果、音の持続時間の対立が失われる。更に、最も

広い母音 a を除いて、短母音は相対的により開いた音であり、長母音は相対的により狭い音であることから、俗語ではこの傾向が進み、ついに母音の長短の意識が消え、音量の対立は音色の対立へと移行する。語源的音量が本質的に音韻論的なものとなる。いわゆるラテン語の母音の音量の変換である：

$\bar{I} > i$, \bar{E} , $\bar{I} > e$, $\bar{E} > e$, $\bar{A} > a$, $\bar{O} > o$, \bar{O} , $\bar{U} > o$, $\bar{U} > u$.

その後も、これらの母音の変容に決定的な影響を与えるのは、強さアクセントであり、音節構成である。口蓋音 yod も母音との結合と母音に対する拘束性によって、フランス語の形成に重要な役割りを演じ、鼻子音はアクセントの有無に関係なく母音に影響を及ぼし、鼻音化はフランス語の音韻変化の特性の一面を成す。

テキストはフランス語の起源となった中世フランスのオイル語の方言、フランシアン語で書かれている。強勢母音の変化に関して、テキストの語彙以外の他の方言については言及を避けた。

古フランス語音韻試論

母音Ⅱ 強勢母音

1. A (古典ラテン語の ā と ă)

a) 自由母音 A

開音節の強勢母音 a は、6 世紀の末か 7 世紀の初めに、二重母音化して ae となり、再び e に単母音化するが⁽¹⁾、その後、古フランス語期に e に狭まる⁽²⁾。

Sáp(i)unt (*sápent) > sevent 6⁽³⁾, tale > tel 49, *bellitáte > beauté 157, contráta > contree 229, veritáte > verité 241, sanitátis > santez 780, gratus > grez 861.

しかし、aqua > eve 308 の場合は、e は e に狭まることがなかった⁽⁴⁾。

-are 動詞の不定詞、過去分詞 -átu, -áta; 直接法現在或いは命令法の二人称複数 -atis; 定過去の三人称複数 -arunt の語尾にこの音韻変化がみられる。

*Devisa (ve) runt > deviserent 30, celáta > celee 41, amare > amer 77, suspirare > souspirer 109, intrátis > entrez 173, computátu > conté 198, mostrátis > moustrez 579.

Legale > loial 2, naturale > natural 98 などの語尾 -ale の a は al として保持されている。これらはラテン語に依る学者語である。

Vaut (< valet) 196, chaut (< calet) 597 の a の保持は各々 valoir (< valère), chalt (<

(1) 先ず、a が引きのばされ、中舌部が前方に出て高められて分割される。その後、二重母音 ae は、その第二要素 e が a を同化して、単母音化する。この変化を Bourciez は 6 世紀末、Fouché は 7 世紀初頭としている。Cf. E. et J. Bourciez, *Phonétique française*, Klincksieck, 1967, §35, Historique; P. Fouché, *Phonétique historique du français*, Volume II, *Les Voyelles*, Klincksieck, 2e éd., 1969, p. 229.

(2) Cf. François de la Chaussée. *Initiation à la phonétique historique de l'ancien français*, Klincksieck, 1974, p. 106; Fouché. *Phonét.*, p. 261.

(3) 三人称複数の sevent は、その後、無強勢の語幹の a がそのまま保持された一、二人称複数 savons, savez とのアナロジーによって savent となった。

(4) Aqua の閉鎖音 k が消え、*awa > *áewa > *éwa > éwa と変化して後、e は w の作用によって保持される。やがて、e と w の間に a が生じ、*éwe > *éawe > éau の段階でアクセントが移動して éau となった。その後、この e は e > i > y に狭まり、俗用語では、*éau > *éau > *iaú > yáú > yə へと変化した。学者語では、16 世紀に eo > oeo が o に縮合された。近代語でも eau と綴られる。Cf. Fouché, *Phonét.*, p. 264, Remarque II, p. 338; André Lanly, *Fiches de philologie française*, Bordas, 1971, pp. 152-4.

caldu) の影響をうけたものと思われる⁽⁵⁾。

更に, mal 589 は male- (>mal-) の複合語の影響である⁽⁶⁾。

Quar 171 は接続詞《car》の意味で quare の a が無強勢母音になったためである⁽⁷⁾。

なお, 定過去の三人称単数の屈折語尾 -avit に関しては, 本稿 8, 二重母音 AU 参照。

b) 拘束母音 A

閉音節の強勢母音 a は変化することなくそのまま保持される。

Amasset > amast 52, arbore > arbre 389, *targa > targe 390, lassu > las 885.

-are 動詞の接続法半過去の一人称単数 celaisse 623, amaisse 803 などでは, ラテン語の接続法大過去 celassem, amassem が定過去の同じ人称の語尾 -ai とのアナロジーによって -aisse の語尾となった。

c) A + y (yod)

強勢母音 a に yod がつつくときは, 二重母音 ai を形成し, ei を経て e に単母音化する。e あるいは ai と綴られる⁽⁸⁾。

Factu > fet 28, facēre > fere 96, hábēat > ait 135, placet > plest 204, laxat > lesse 244, *malifatus > mauvés 302, *trāgēre > trere 322, lacrima > lerne 469⁽⁹⁾, tracta > traite 569, *tragit > trait 853.

この e は絶対語末の場合は古フランス語期から e に狭められる。従って, avoir の直接法現在, -er 動詞の定過去と全ての未来形の一人称単数では e である。

Sapio > sai 74⁽¹⁰⁾, habeo > *ayo > ai 114, pensavi > pensai 194, dicere-habeo > dirai 341, amare-habeo > amerei 493.

Cabaláriu > chevalier 19, vir(i)diáriu > vergier 30⁽¹¹⁾ などに現われる接尾辞 -ariu > -ier

(5) Cf. Bourciez, Phonét., §36, Rem.

(6) Cf. Fouché, Phonét., p.174.

(7) Cf. Ibid., p.176.

(8) ai > ei は11世紀末, 単母音化は12世紀である。Cf. Bourciez, Phonét., §38, Hist.

(9) 中代フランス語期に r + 子音の前の e は, しばしば a に開いたが, 近代語 larme はこの -ar- が語源に基くものと誤解されて定着した語形である。Cf. Ibid., §47, Rem. II ; Fouché, Phonét., p. 349.

(10) Sai は近代語では一般に [se] であるが, これは, sapit > set 115 の a に由来する e が発音される語末子音の前で開いた e による影響か, 或いは, sai の如く頻繁に不定詞の前で後接的に用いられた一人称単数 fai (s) などの影響である。一人称単数 fai (s) は二人称単数 fais < facis に依ってつくられた語形 (古フランス語では faz < facio) だが, 二人称単数 fais と同様に, 最初から e と発音された。Cf. Ibid., p. 259.

(11) Vergier の語尾 i は, 中代フランス語期に, 後に述べるバルチュの法則によって現われた [y] と混同されて, i が消失し, verger となった。Cf. Bourciez, Phonét., §41, Hist.

の音韻変化は特別である。Fouché は、これをゲルマン語の影響によるとする A. Thomas の理論に対して、純粋な音韻変化として説明している¹³。

強勢母音 a につづく yod が別の子音と結合して cy, ly, ty などのグループを成すか、唇音の後にあって子音化するとき、a は拘束母音となってそのまま保持される。

Solácium > solaz 296, *aetáticu > eage 336¹⁴, brác(h)iu > braz 398, facia > face 636, sápiat > sache 639¹⁴, *coraticu > corage 692.

なお, placeat は古フランス語では place の語形で現われるが, plaise 499 は直接法現在の二人称単数 places > plais とのアナロジーである。

d) Y+A

強勢の a は、口蓋音 yod によって口蓋化された子音 [ts(y) 或いは tš(y) に口蓋化された k や湿音化された ʃ や ŋ] のあとにあるときは、e に狭められ、二重母音化して ié[ye] となる¹⁵。

Capu > chief 142, caru > chier 534, *piy(e)tate > pitié 612, me(d)ī(e)tate > moitié 761.

実詞や形容詞の他、動詞では強変化動詞の語幹と不定詞、過去分詞の語尾、直接法の現在と半過去、命令法、接続法現在、条件法の二人称複数の語尾に現われ、接続法、条件法では二人称複数は近代語でも規則的に -iez の語尾となる。

(12) 接尾辞 -áriu では、まず、yod が子音 r の前に転移して -ayryo となり、a は内破音 y の同化作用と、同時に外破音 y の遠隔同化作用によって e に狭められ、-éirio の e はそれにつづく i の影響をうけて二重母音化し、-ieiryo となる。その後、子音につづく外破音の yod が消失し、-ieiro へと変化する。更に、語末の母音が脱落し -ieir となるが、間もなく、内破音グループ -ir は、第一要素にアクセントを持つグループ ie のあとにあって、r に単純化される：-áriu > *áiryo > *éirio > *ieiryo > *ieiro > *ieir > -ier. Cf. Fouché, Phonét., p. 413; Bourciez, Phonét., §39; Lanly, Fiches, pp. 48-9.

(13) 接尾辞 -áticu の変化は次の如く推定される：-áticu > *adīgu > *adīru > *adīu > *adyu(adyo) > *adžyo > -adžo > -adže > -a(d)žę > -až(ə). まず、母音間にある子音が各々有声化し、u の前にある軟口蓋子音 g は狭窄音[ɣ]に弱まった後、硬口蓋母音 i のあとにあって無音化する。5 世紀頃のことである。その後、y は音の勢いを弱め、前の歯音に同化されて、持続部の第一部で、その調音点をこの歯音の調音点に近づける。つまり、中部硬口蓋音から前部硬口蓋音となり、žy に複分解する。それから、外破音の yod が消え、8 世紀頃、*adžę から 13 世紀には -á(d)ž(ə) となり、-age と綴られる。Cf. Fouché, Phonétique historique du français, Volume III, Les Consonnes, Klincksieck, 1966, p. 935; Lanly, Fiches, pp. 47-8.

(14) Sapiat の場合も、同様に、先行する唇音の影響によって、y は調音点を前方に移し、その音の持続部の第一部の間、中部硬口蓋音から前部硬口蓋音となる。これは先行する唇音の持続部の第二部に一致する。その結果、p のわたりから s が生じる：Sápiat > *sapyat > *sapša(*saptša) > *sattša > *satša > satšę > sa(t)šę > saš(ę) > saš(ə). Cf. Fouché, Phonét., Vol. III, pp. 925-6.

(15) a は口蓋音との接触によって、その調音点を口蓋音に近づけて e となるが、これは自発的な a の二重母音化の時期より早く、6 世紀頃のことと推定される。その後、e が二重母音化し、ie > ię と変化してから、アクセントが e に移動して、i は yod となる。更に、13 世紀頃にはこの yod が消えて e となる。これがいわゆるバルチュの法則である。Cf. Bourciez, Phonét., §41; Lanly, Fiches, p. 45; Fouché, Phonét., Vol. III, p. 907.

Sapiátis > sachiez 176, *habereátis > avriiez 223, *molliátu > moillié 311, cogitatis > cuidiez 318, *voleatis > vueilliez 361, collocare > couchier 517, laxatu > lessie 730, solaciare > solacier 859, habebatis > aviiez 892, cadit > chiet 922.

しかし、中代フランス語期に ch, g[š, ž] や湿音化された l, ŋ のあとでは、この ié は e に統合され、近代語では chef, cher, sachez, mouillé, veuillez, coucher となったが, laissé ではアナロジーによって y が消失した。

e) Y + A + Y

強勢の a に y が先行し、更に a の後に i がつく場合は、この二つの口蓋音に影響されて、中央の a は yaï > yeï > yeï > yii と次第に狭められ、全体が i に縮合される : Jacet > gist 838¹⁶⁾。但し, gise 93 は jácēat > jace¹⁷⁾ が直接法現在の三人称複数 jacent > gisent の影響を受けて変形したものと思われる。

f) A + 鼻子音

開音節の強勢母音 a は、n, m の前では、すでに述べた二重母音化 áę の段階で、第二要素 e が鼻子音に同化され i に狭まり、鼻音化して aĩ となる。更に、第一要素の a も鼻音化し、ĩ に同化して ě に狭められ、単母音化する : aĩ > āĩ > ěĩ > ě¹⁸⁾。

*Superána > souveraine 79, villana > vilaine 97, fame > faim 408, septimana > semaine 454, *primarana > premeraine 687, remanet > remaint 723, manu > main 853¹⁹⁾。

その後、外破音の鼻母音は、15世紀の中頃或いは16世紀の初頭までに、非鼻音化して ě となり、鼻子音ははっきり発音されたが、一方、内破音の鼻母音は保持され、鼻子音は16世紀の末音韻上消失する。

Cane > chien 358 では a + 鼻子音に yod が先行している。yod の影響によって a が ě に狭まり、二重母音化し、iĕ はその第二要素が鼻音化して -iĕn となる。その後、アクセントが移動し、鼻母音が ě に開いて [šyĕ(n)] となった。

強勢母音 a が鼻子音 + 子音或は鼻子音の重複によって拘束母音となるときは、a は10世紀の末頃 ā に鼻音化する。

(16) Cf. Jácet > *džyájdzet > *džyéjts(e)t > *džyii(t)st > džist.

(17) Cf. 本稿 1, c) A + Y。強勢母音 a はグループ cy によって拘束母音となる。

(18) 二重母音 aę は第二要素が鼻子音に同化され易く、e が鼻子音の調音点の動きを先取りする結果、e が i に変わったものだが、e が広母音 a と接触していることから、異化作用によって e が自ら i に狭まったと推定することもできる。Cf. Fouché, Phonét., p. 355.

この二重母音 aĩ の第二要素 i の鼻音化は10世紀から始まり、第一要素 a の鼻音化は10世紀末と推定されている。a の鼻音化は ĩ が介在するので、鼻子音との接触によるのではなく、最初に鼻音化した ĩ の影響によるものである。Cf. Ibid., p. 364.

(19) Cf. Mānu > mǎnu > mǎn(o) > mǎĭn > mĕĭn > mĕ(ĭ)n > mĕ (Lanly, Fiches, p. 208.).

Similante > samblant 2²⁰, quando > quant 13, grande > grant 17, tantu > tant 21, cam(e)ra > chambre 37, *iterante > errant 111, *ab-ante > avant 174, an(i)ma > ame 211²¹, annus > anz 456.

その後、内破音の n は、他の非鼻音化しない鼻母音につづく鼻子音と同様に、中代フランス語期に脱落するまで保持される。

強勢母音 a が yod によって湿音化された ŋ に先行し、ŋ の後に母音がつづく場合は、a は ã に鼻音化して保持される。ŋ の書法は gne である。

*Compania > compaingne 298, remaneat > remaingne 524.

ŋ が語末となるか、それに子音がつづく場合は、a は二重母音化と鼻音化を経て ãĩ > ĕĩ となる。その後、ĕ は ĭ に同化して ĕ̃ に狭まり、ĕĩ は ĕ̃ に単母音化する²²。

Sanctus > sains 417, plangit > plaint 480.

2. 開音 E (古典ラテン語の ĕ)

a) 自由母音の開音 E

4 世紀或いは 5 世紀に起こったラテン語の母音の音量の変換⁽¹⁾によって、音の長さの対立が失われ、音色の対立がこれにとって代った。この結果、開音の ĕ は強勢アクセントのために音の持続時間を増し ē となり、二重母音化して yē となる⁽²⁾。

*Grève > grief 141, *ad-retro > arriere 243, laetu > lié 312, grēvet > griet 367, pēde >

(20) この -are 動詞の現在分詞の語尾 -ante が本来は -ente, -iente などの語尾を持つ動詞にも用いられ、すべての動詞の現在分詞は同形の語尾 ant[ã] となる。Cf. Conven(i)ente, -ante > couvenant 23, vivente, -ante > vivant 331, aud(i)ente, -ante > oiant 928.

(21) Ān(i)ma では n が m に同化して消え、先行する母音が長音となり、軟口蓋音化する。その後、鼻子音 + e の前にある母音 a が非鼻音化する。従って、近代語 âme の a は後母音であり、a のアクセント・シルコンフレックスは消失した n の名残りである。

(22) Fouché は ãĩ > ĕĩ の変化を 12 世紀前半、ĕĩ > ĕ̃ĩ を 12 世紀中頃としている。なお、この ĕ̃ は中代フランス語期に再び ĕ̃ に開いて近代語に至る：Saint[sĕ̃], plaint[plĕ̃]. Cf. Phonét., pp. 375-6.

(1) Cf. Fouché, Phonét., pp. 214-5; De la Chaussée, Initiation à la phonét., 6.2.1.1; 15.2.1.1.1; 本稿冒頭の Résumé.

(2) ラテン語の母音の音量の変換によって、ē が長くなり始めると、母音の持続時間の最後の部分に現われる筋肉の緊張の弛みから、先ず、5 世紀の後半、ē が ee に分割される。それから、第一要素が狭められて ēe となり、更に、異化作用によって 6 世紀には iē となる。そして、7 世紀から 8 世紀の間に、第二要素が開口度の前進同化によって iē に狭まり、12 世紀にはアクセントが移動し、i が子音化して yē へと変化する。その後、子音の前で yē の ē は俗用語では 13 世紀に、学者語では、16 世紀に ē に開いた。Cf. Fouché, Phonét., p. 223, pp. 250-1; Bourciez, Phonét., §46, Hist.

pié 373, quáerère > quiere 857⁽³⁾, *enquérun > enquierent 958.

Déu > Dieu 61 では [diéu] に変化してから, e は u の前で oe に唇音化し, 無強勢の i が yod となる。語末の母音 u は oe に弱音化して消失する。[dyoe] は音韻変化の過程をとどめて dieu と綴られる。

b) 拘束母音の開音 E

ラテン語の拘束母音 ě, つまり, 閉音節にある短母音の ě は変化することなくそのまま保持される。

Discōpĕrtu > decouvert 10, tĕrra > terre 170, *missi-servit > messert 287, pĕrdĕre > perdre 327, bella > bele 635.

Bĕllus > biaus 43 は beaus の方言的変形である⁽⁴⁾。

c) 開音 E + Y

強勢の ě に yod がつづくときは, 両者が結合して ěi を成し, ě が i の影響をうけて二重母音化し, 三重母音 ěiĭ を形成して後, 中間音の ě が二つの i に同化して i となる⁽⁵⁾。

*Sĕior > sire 60⁽⁶⁾, précat > prie 100, lectu > lit 433, despĕcta > despite 662, médiu > mi 839⁽⁷⁾。

しかし, mélius > mieus 307 の場合は, この三重母音のあとに ĩ がつづいている。ěiĭ の ĩ は

(3) しかし, querre 169 の方が一般的な語形である。この場合は, 先ず, 第二尾音節の無強勢母音 ě が脱落し, áĕ > ě が拘束母音となって二重母音化を妨げた。

(4) Bĕllus では, 語末の母音 u が消失し, 二重子音 -ll- が単子音化する。そしてこの l が子音の前で軟口蓋音化して [*beɫs] となるが, e と ɫ の調音点が著しく隔っているため, その間にわたりの a が生じ, [*beaɫs] となる。その後, ɫ の母音化によって, 一般に, beaus の語形が現われる。Biaus はこの -eau が -iau に変わった特に北東部の方言に属する語形である。Cf. Bourciez, Phonét., §48, Hist., Rem. II.

(5) 二重子音 ěi がガロ・ロマン期に三重母音 ěiĭ を成すに至る過程は Fouché によれば次の如くである。ĩ との接触によって ě の最後の部分は当然狭められる傾向にあったが, 言語はこの同化作用に抵抗し, 異化作用によって最後の部分を開き, ě が ěĕ に分割される。その後, 更に異化作用が進み, 今度は, 第一要素が狭まり, ěĕi が ěiĭ となった。Cf. Fouhé, Phonét., p.289.

(6) *Sĕior は sĕyyor と発音されていたが, 内破音の yod が先行する ě と結合して ěi を成した。この内破音の yod はそのあとに外破音の yod がつづいて音節を狭め, 音量の変換の時期に強勢母音 ě の長音化を妨げた。従って, ě は 5 世紀末の自発的二重母音化を起こさなかったが, 6 世紀頃, i の影響による被制約的二重母音化を経て, ěiĭ > ěii > i へと変化した: *Sĕior(=sĕyyor) > *sĕiĭor > *sĕiĭor > *sĕiĭor(o)rĕ > *sĕiĭre > sire. Cf. Lanly, Fiches, p. 324.

(7) Médiu の dy は, 1 世紀頃, 閉鎖音から摩擦音に変わり, その後, yy に弱音化して y に縮合される: *Médiu > *méy/yy > *mĕy/yo > *miĕy > *miei > mi.

この *ɪ* に融合して *ie* に縮約される⁽⁸⁾。

**Mistérieu* > *mestier* 717 で、*iei* のあとに語末の *r* がつづく。この場合も、三重母音は最後の要素を失って *ie* となる。

Néptia(< *nēptis*) > *niece* 342 では、*e* に二つの子音がつづき、二番目の子音が *yod* と結合して *pty* を成す。*e* は子音に隔てられながら、この *yod* の影響をうけて二重母音化する⁽⁹⁾。

d) 開音 E + 鼻子音

強勢の自由母音 *e* に内破音或いは外破音の *m, n* がつづくときも、自発的に二重母音化するが、10世紀の中頃、*ie* の段階でその第二要素が鼻音化して *iĕ* となり、その後、アクセントが移動し、鼻母音が *ĕ* に開いて *yĕ* となる。*ien* と綴られる。

Vēnit > *vient* 5, *bēne* > *bien* 37, *rēm* > *rien* 38, *subvēnit* > *sovient* 212, **crēmīt* > *crient* 283, **tenunt* > *tienent* 377, *mĕum* > *mien(s)* 773⁽¹⁰⁾。

但し、その後、鼻子音が外破音である場合は、鼻母音は中代フランス語期に再び口母音となる：
[*tyĕnə*] > [*tyen*]。

強勢の *e* が鼻子音+子音によって拘束母音となるときは、*e* が先ず *ĕ* に狭まり、10世紀の末、*ā* の鼻音化よりわずかに遅れて、*ĕ* に鼻音化し、11世紀の後半には *ĕ* > *ĕ̃* > *ā* と次第に広い鼻母音となった。書法上は *en(m)*, *an(m)* である。

Gĕn(i)tu > *gent* 1, *tĕmpus* > *tens* 129, *pĕndĕre* > *pendre* 176, > *trĕm(ũ)lant* > *tramblent* 179, *remĕm(ō)rat* > *remembre* 180, *tormĕntu* > *torment* 235, *fidĕntia* > *fiance* 606。

3. 閉音 E (古典ラテン語の *ē, ĭ*)

a) 自由母音の閉音 E

強勢の自由母音 *e* は、7世紀の末、*ei* に二重母音化した後、異化作用によって *qi* となり、更

(8) *Mélius* は *yod* が *l* の前に転移して現われ、**miēilyos* となる。*i* は *ɪ* に隔合して消え **miēl(y)os* が *miēuls* となる。それから、内破音 *ɪ* の母音化とアクセントの移動によって *myēuts* に変わる。その後、*yēu* の *e* が *oe* に唇音化し、*yoeu* は12世紀前半に *yoe* となり、近代語 *mieux*[*myœ*] に至った：*Mélius* > **mēlyus* > **miēilyos* > **miēl(y)os* > **miēlos* > **miēl(ĕ)s* > **miēls* > **miēlts* > [**myēlts*] > [**myēuts*] > [**myœuts*] > [**myœs*] > [*myœ*]。Cf. Fouché, *Phonét.*, Vol. III, p. 916; Lanly, *Fiches*, pp. 219-220。

(9) Fouché は、**nĕptsya* > **nĕttsya* の段階で、四つの子音の最初の内破音要素は、持続時間が最も短縮されるので、これを補うために、その前の母音は短音(*ĕ*)ながら、二重母音化を起こすのに十分な長さを持つことができたと推定している。Cf. *Phonét.*, p. 236。

(10) 強勢形の所有形容詞一人称男性単数の名格 *miens* は、その対格 *mĕum* > *mien* からつくられた語形である。語末の母音 *ũ* は、そのあとに内破音の *m* がつづいて、*u* に子音化せず、前の *e* と母音接続を保持して、*e* の二重母音化を妨げた。そのために、*ũ* は *o* に開いて *mĕon* となり、*e/o* の各々の音節の境界を明瞭に保つために、*e* の発音が誇張されて、*e* が次第に *i* に変わった。その後、*ie* はアクセントを移して *ié* となり、語末の *n* と接触して、*yĕ* > *yĕ̃* へと変化したものと推定される。Cf. *Ibid.*, pp. 318, 342-3。

に、同化作用とアクセントの移動によって13世紀には〔we〕に至る⁽¹⁾。

Fide > foi 68, mē > moi 84,⁽²⁾ habēre > avoir 90, *sīat > soit 184, crēdēre > croire 244, via > voie 384, me(n)se > mois 455, trēs > trois 456, sēru > soir 560, potēre⁽³⁾ > pooir 784, ĭter > oirre 915.

この〔we〕は半過去と条件法の単数（及び三人称複数）に規則的に現われる⁽⁴⁾。

Habēat > avoit 23, *viderēbat > verroit 35, *sedréat > serroit 65, *poterēbat > porroit 69, cogitēbat > cuidoit 213, solēbat > soloit 297, audiēbat > ooit 442, *saperēbat > savroit 444, *venirēbat > vendroit 458, *morirēbam > morroie 501, amēbam > amoie 739, credēbam > creioie 792.

動詞の二人称複数の語尾に関しては、vidētis, volētis, tenētis, potētis などの直接法現在、-are 動詞の語尾-atis > ez とのアナロジーによって、各々 veez 71, volez 218, tenez 534, poēz 756 となった。

Habuissētis, *fu(i)ssētis, sapuissētis, debuissētis などはその語尾-eiz > -oiz が -iez に置き換えられ、直接法現在には各々 eüssiez 64, fussiez 161, seüssiez 602, deüssiez 767 の語形を成した。

- (1) 自由母音 é は、まず、中舌が前方に出て押し上げられ、その最後の部分の音が i に狭められて ēi に二重母音化する。その後 ēi は、ē が i に狭められる危険に脅かされて、oei に異化し、12世紀中頃、もう一度、強い異化作用によつて ói に移行する。更に、12世紀末から13世紀の初め頃に、この二重母音 oi は、第二要素が第一要素の音の開きに同化して、óe となる。それから óe は o より可聴度の高い e にアクセントを移し、oé から〔we〕へと変わり、ē が〔w〕の影響をうけて ē が開き、〔we〕に至った。しかし、書法上は相変わらず oi である。

この〔we〕は、学者語としては、16世紀に至るまで、3世紀以上の間堅持されるが、俗語では、すでに13世紀から〔w〕の影響によって ē は更に a にまで開き、〔wa〕と発音されるようになった。しかし、パリ市民や宮庭にまで広がったこの新しい発音に16世紀の多くの文法学者が反論を唱えた。古典時代にもこの事情は変わらず、〔wa〕は卑俗な発音とみなされていた。18世紀の初めに至って、〔wa〕は漸くフランスの文法家の間で市民権を獲得するが、彼らがこの発音を認める語は極めて限られていた。パリの俗間に始まったこの発音がフランス語の正式な発音として取り入れられるのは、実に革命後のことである。Cf. Fouché, Phonét., pp. 270-2.

- (2) 三人称 sé > soi も現われるが、mē > me 91, sē > se 189 などは、前置詞 dē > de 210 と同様に、後接的用法によるものであり、関係代名詞も強勢の *que は qoi 252 に、無強勢の *que は que 297 となった。Cf. Ibid., p. 171.
- (3) すでに、ラテン語期に語尾 -ēre を -ēre に代えた不定詞がある：Sapēre > *sapēre > savoir 213, cadēre > *cadēre > cheoir 730. 更に、-ēre が -ire に代った例もある：Gaudēre > *gaudire > joir 181.
- (4) 二重母音 ei に由来する〔we〕のすべてが現在〔wa〕と発音されているのではない。〔we〕 >〔wa〕への変化とは別に、1300年頃、パリ市民の間に〔we〕を〔ē〕に縮約して発音する傾向があった。しかし、〔we〕ではなく、〔ē〕がある種の語に規則的に現われるのは16世紀であり、半過去と条件法の語尾と、いくつかの国民の名や、raide (本稿3, c) 閉音 E+yod 参照) など一連の語に〔ē〕を採用し、oi の代りに ai と書くことがアカデミーによって認められるのは、1835年のことである。Cf. Fouché, Phonét., p.273; Bourciez, Phonét., §54, Hist.; Lanly, Fiches, p.39.

しかし、接続法現在では *gwardetis > gardoiz 139 に -oiz の語尾が現われる。これは東部方言に属する語形であり、正しい音韻変化を示すが、この語尾も、やがて、-ez を経て -iez に換えられることになる⁽⁵⁾。

未来形 dicere-(hab)ētis でも、-eiz > -oiz が -ez に置き換えられ、direz 220 などの語形が広く一般化するの13世紀からのことである⁽⁶⁾。

b) 拘束母音の閉音 E

強勢の閉音 e は、拘束母音であるときは、e のまま保持されて後、12世紀中頃、e に開く。

Mittit > met 384, illa > ele 902, promissa > promesse 918.

Chienet 880 の指小辞 -et は -ittu に、pucelete 727 の -ete は -itta に由来する。

強勢の拘束母音 e に語末の i がつづくときは、e は遠隔同化によって i に変わった。

*Īlli > illi > il 6, *vīnti > *vīnti > vint 457, *ecce-īlli > icil 462, *ecce-īsti > cist 785, nec-īpsī > neis 908.

Dixistis > *dexistis > deistes 202 では、二人称単数の屈折語尾 -isti の短母音 i が、語末の長母音 i の同化作用によって、i に狭まり、*-īsti となったことから、語末に長母音 i がない二人称複数でも、-istis が *-istis となった。

*Tēnit > *tīnit > tint 103, fēcīt > fīcīt > fist 239, prē(n)sīt > prīsīt > prist 239 など定過去の語幹は一樣に e であったが、一人称単数 *tēnī > *tīnī, fēcī > *fici, prē(n)sī > *prīsī の母音変異とのアナロジーによって i に変わった。

定過去の影響をうけて、接続法半過去の形成に於ても、ラテン語の接続法大過去の屈折語尾に i が保持された⁽⁷⁾。

Venisset > venist 36, fecisset > feīst 53, dixissem > deisse 207, *tenissem > tenisse 247, perdissem > perdisse 778, volsisset > vousist 950.

Sapuisset > seūst 24, habuisset > eūst 50, potuisset > peūst 51 では、i は初めはラテン

(5) 直接法現在の一人称複数 *gwardēmus > *gardeins が gardons に変わったこと(本稿 3, e) 閉音 E + 鼻子音参照)によって、直接法現在と接続法現在の一、三人称複数が各々同形となったので、二人称複数でも、*gwardatis > gardez に依って、*gwardētis は gardeiz (西部方言), gardoiz (東部方言) 以外では、gardez となり、-are 動詞の大部分の直接法と接続法の現在は複数形が同じ語形となった。しかし、changier の如く、cambiēmus > *changins が直接法現在 chanjons と異なる場合も、接続法現在の二人称複数 cambiētis > *changiz (本稿 3, d) Y + 閉音 E 参照) は直接法現在の同じ人称の語形 cambiātis > changiez に変わった。この changiez とのアナロジーによって、*gwardetis も、その語尾が -iez に置き換えられた。Cf. Fouché, Le verbe français, Klincksieck, 1967, pp.203-4.

(6) Cf. Ibid., pp. 411-2.

(7) Cf. 拙論「古フランス語音韻試論」母音 I, B. 無強勢母音の保持, 注 (39), (40), 群馬県立女子大学紀要, 第3号, 1983.

語の音色を保ったが、その後、先行するwの作用によって〔ü〕に唇音化した⁽⁸⁾。

強勢のeがl＋子音によって拘束母音となるときは、フランシアン語では、子音の前のlがuに母音化すると、この唇音の影響をうけて、eはoeに移り、oeuとなつてから、第一要素oeがuを同化して、12世紀の末頃、oeに至る。euと綴られる：Ecce-illos > ceus 118 (923), illos > eus 653 (654, 859)。

但し、illos > aus 4 (13, 42, 155) の語形もある。二重母音euはピカルディ方言ではuに影響されてeがeに開き、ラテン語のēに由来するeuと同じ過程をたどった。しかも、ピカルディ、ヴァロン、ローレーヌ、ブルゴーニュ、フランシュ・コンテ地方の一部などでは、euは、更に、auに開くことがあり、シャンパーニュ地方や西部地方、オルレアネやニヴェルネの方言では、eu > auは一般に広まっていたらしい⁽⁹⁾。一方、二重母音euはtales > telsの如く開音節の強勢母音aに由来するeと子音の前のlの母音化によるuとの結合からも生じる。シャンパーニュ地方とピカルディ地方の一部ではeuにとどまる：Teus 882。しかし、一般には、eはuの作用でeeに分割され、三重母音éeuを成し、これがロマン語の二重母音euと同様に、ieeuに変わり (cf. deu > dieu 61), iéeuを経て、[yoeu] から yoeuに至った：(I)tieus 774。

c) 開音E＋Y

強勢のeにyodがつづくときは、両者が結合してeiを成し、すでに述べた過程を経て、oi > waへと変化し、書法上はoiとなる。

Dígita > doie 78, d(i)récctu > droit 98, *octridio(*octrico) > otroi 366, vice > foiz 402, arbitriu > arvoire 595, vídeat > voie 843, rígida > roide 868⁽¹⁰⁾。

過去分詞dit 14はdicereの影響をうけて変化した*dictu(<dictum)に由来する。

*Prode+itia > proësce 157, laetitia > leece 780などでは、語尾-itiaが-iciaに入れ替わり、justitia > justise 894では-itiaが、おそらく女性形の過去分詞-itaに影響されて、*itiaに変わったものと推定される⁽¹¹⁾。

強勢のeのあとにlと結合するyodがつづくときは、このlはlに湿音化する。eはyodに拘束されて二重母音化せず、12世紀中頃、eに開く。

Consiliu > conseil 3⁽¹²⁾, *meribília > merveille 82, auríc(u)la > oreille 846。

(8) Cf. Ibid., B. 注 (46). なお Fouché は、この場合には、強勢母音íの長母音化を想定する必要はないとしている (Phonét., p. 400, 2°, a)。

(9) Cf. Ibid., p. 304, Rem. I, II.

(10) 本稿 3, a) 自由母音の開音E, 注(4)。

(11) Cf. Bourciez, Phonét., §58, Rem. III.

(12) グループlyは、2世紀頃、yの発音がlの音の持続部に浸入して、lが湿音となり、このyodは、3世紀から5世紀頃の間、子音lの前に転移する：-ly- > -ly- > -yl(y)-。その後、8世紀の中頃、このyはそれにつづく湿音lに吸収され、語末の母音uが5世紀の後半、oとなつてから、7世紀の末に消失すると、lは語末子音となつて保持されるが、18世紀の末から19世紀の初め頃、yに弱音化する。語末の-il (le)はlの書法である：Consiliu > [*konsilyu] > [*konséyl(y)o] > [*konséyl(y)] > [*konsél(y)] > [kõnsɛl] > [kõnsɛl] > [kõsɛy]。

d) Y+閉音E

強勢の自由母音 ϵ は先行する yod と結合し、 ϵ は7世紀に ei に二重母音化して、 yei を成す。その後、中央の e は、それを囲む y と i に同化され、 $y\acute{i}$ が i に縮合される。

Pagé(n)se > país 7, mercède > merci 61, jacère > gesir 569.

従って、nocère, tacère も nuisir, taisir となったが、12世紀から facère > fere 96, tragère > trere 322 などとのアナロジーによって、各々 nuire 69, tere 353 が現われた。

*Facébat > fesoit 446, jacébat > gisoit 728, dicébat > disoit 786 などの語尾では、他の動詞の半過去と語形を同じくするために、硬口蓋音の影響を逃れた。

e) 閉音E+鼻子音

強勢の自由母音 ϵ に内破音或いは外破音の m, n がつづくときも、他の子音がつづく場合と同様に、自発的に二重母音化する。10世紀の中頃、 ei の段階で、先ず、第二要素が鼻音化し $e\bar{i}$ となり、 $a\bar{i}$ > $\bar{a}i$ とほとんど同じ時期に、第一要素も鼻音化し、 $\bar{e}\bar{i}$ となる。次に、二重鼻母音 $\bar{e}\bar{i}$ は、その第二要素を失って \bar{e} となる。書法上は ai である。

*Pēna > paine 80¹³, minus > mains 162¹⁴, mīnat > maine 453¹⁵.

この \bar{e} は中代フランス語期に \bar{e} に開かれ、フランス語に於て、鼻子音が内破音であるとき（鼻子音が絶対語末となるか、或いは、それに s がつづく場合）は、鼻子音は消失するが、鼻子音が外破音であるとき（ $m, n + e$ の場合）は、鼻母音は非鼻音化し、鼻子音ははっきり発音されつづける。従って、近代語では $[p\epsilon n]$, $[m\epsilon n]$ である。

Habēmus の如き一人称複数の語尾 $-\bar{e}mus$ はアナロジーによって $-\bar{u}mus$ (> $-\text{ons}$) に置き換えられた：Avon 137.

強勢の ϵ が鼻子音+子音によって拘束母音であるときは、 ϵ は10世紀の末、 \bar{e} に鼻音化し、11世紀には \bar{e} から、更に \bar{a} に開く。 $en(em)$, $am(an)$ と綴られる。

Subinde > souvent 15, sīm(u)lat > samble 141, fēm(i)na > fame 152, prēndēre > prendre 175, īnsimul > ensemble 434.

しかし、フランス語に於て鼻子音が外破音であるときは、16世紀に鼻母音が再び口母音に戻り、鼻子音が保持される。従って、 $fēm(i)na$ は、二重鼻子音の単純化によって、 \bar{a} が a に非鼻母化し、近代語では $[fam]$ であるが、書法は二重鼻子音のあとをとどめて $femme$ である。

Samble, ensemble は、近代語では、各々 semble, ensemble だが、*de-deīntus > dedenz 433

(13) 近代語の $peine$ は $*pēna$ に依る学者語である。

(14) Bourciez は、ロレーヌ地方、ブルゴーニュ地方など、東部の方言では、鼻音化が遅れ、鼻子音の前で ei から oi への変化も起こり、唇音の鼻子音 m のあとで、パリでは $\bar{e}in$ か $w\bar{e}in$ かの迷いが生じたとして、近代語 $moins$ の語形を説明している。Cf. Phonét., § 60, Rem. I.

(15) Maine は中代フランス語期に $mener$ に依って $m\bar{e}ne$ に変わった後、アナロジーによって近代語では $mène$ となった。

は、近代語では、*dedans* となり、*sīne* > *sanz* 434 は、今なお、*sans* と綴られる。

強勢の *ɛ* が *yod* によって湿音化された *ɲ* の前にあるときは、*ɛ* は10世紀の末、*ɛ̃* に鼻音化する。*ain* (*ein*) がその書法である：*Tingit* > *taint* 724, *stringit* > *estraint* 835.

4. I (古典ラテン語の *i*)

強勢の *i* は自由母音でも拘束母音でも変化しない。

Misit > *mist* 59, *visu* > *vis* 69, *ira* > *ire* 178, **wisa* > *guise* 199, **traditor* > *trahitre(s)* 201, *dēsīdērat* > *desire* 225, *vīta* > *vie* 453, **audistis* > *oistes* 625, *vivēre* > *vivre* 817, *occīsu* > *ocis* 913, **rīdēre* > *rire* 940.

不定詞の語尾 *-ire* は *-ir* となる。

**Faillire* > *faillir* 16, **gaudire* > *joir* 181, **morire* > *morir* 326, *ēxire* > *issir* 393, *venire* > *venir* 394, *dormire* > *dormir* 434, *audire* > *oïr* 928.

フランク語 *hatjan* の語尾 *-jan* はこの *-ire* の語尾を採用し、**hatire* > *haïr* 152 となった。

過去分詞 *-itu, -ita* の語尾は *-i, -ie* となる：*Partitu* > *parti* 269, **fide-mentita* > *foimentie* 279.

なお、*cortoisie* 299, *maladie* 516 の語尾 *-ie* は、ラテン語の語尾 *-ia* がギリシヤ語に由来する *-īa* に置き換えられたことによる⁽¹⁾。

二人称複数 *hatitis* の語尾 *-itis* は *-are* 動詞 *-atis* > *-ez* とのアナロジーによって *-ez* となった：*Haez* 125.

関係代名詞 *quī* と接続詞 *sī* は無強勢なので各々 **quī, sī* となり、主格の *que* 204, *se* 71 となる。しかし、この *se* は *s'il* の頻度が高いために、中代フランス語期に *si* が復活する。

強勢の *i* に *yod* がつづいても *i* は変化しない。

Sic > *si* 3, *dicēre* > *dire* 131, *mīca* > *mie* 542, *amīcu* > *ami* 878.

鼻子音の前の *i* は、拘束母音でも自由母音でも、13世紀の前半に *ī* に鼻音化し、14世紀には *ē̃* から更に *ē̃* へと開く。書法は *in* である。

**Tinit* > *tint* 103, **camīnus* > *chemin* 377, *vīnti* > *vint* 457.

5. 開音O (古典ラテン語の *o*)

a) 自由母音の開音O

強勢の自由母音 *o* は、開音 *ɛ̃* の自発的な二重母音化と同様の要因によって、二重母音化し(本

(1) Cf. Bourciez, *Phonét.*, §68, Rem. I.

稿2, 開音 E, 注(1), (2)参照), 12世紀には œ に至り, eu, ue, œ と綴られる⁽¹⁾。

*Discōperit > descuevre 5⁽²⁾, ōpera > uevre 6(oevre 665), cōr > cuer 50⁽³⁾, fōru > fuer 94⁽⁴⁾, *pōtet > puet 106, dōlu > duel 114, dōlus > deus 156, *vōlet > veut 184, *illōque > iluec 375, mōvet > muet 387, *sōferit > sueffre⁽⁵⁾, sōror > suer 613, *trōpat > trueve 857⁽⁶⁾, rōgat > rueve 856, *sarcōfu > sarqueu 937⁽⁷⁾。

但し, pōtūit > pot 145 の如く, q につづく音韻構成によって, 複雑な変化を示す場合がある⁽⁸⁾。

ラテン語の fōris は, 書き言葉としては, 副詞であったので, アクセントが置かれたが, 帝政末期には前置詞として用いられ, 無強勢となった: Fors 42, hors 170⁽⁹⁾。

b) 拘束母音の開音 O

強勢の拘束母音 q は変化することなく保持される。

(1) 開音 e の自発的二重母音化とはほとんど並行して, 5世紀の後半, q は, e の場合と同様に, 持続部の最後の部分が開き, qq に分割される。その後, 第一要素がより開いたもう一つの母音と接触していることから, 異化作用によって q から更に u にまで狭められ qq > uq となる。6世紀には, 今度は, q が q に狭まり úq を成す。それから, 7世紀末に第二要素 q がもう一度異化作用によって e に変わり, úe となる。その後, 8世紀頃, u が硬口蓋化して úie となり, 9世紀には e が œ に唇音化して, úie になる。そして, 12世紀にはアクセントが移動し, úie > wúe から, w が œ に同化吸収されて œ に至ると推定される。更に, この œ は, 発音される子音の前では, 13世紀から17世紀の間に, œ に開く。しかし, 学者語としては, œ は, 語末でも子音の前でも, 17世紀の前半まで閉音を保持したと思われる。Cf. Fouché, Phonét., pp. 252-3.

(2) Discōperit の如く q に唇音がつづく場合は, 俗ラテン語期に q が q に開くことがあった。

(3) Uevre(oevre), cuer は近代語では各々 oeuvre, coeur である。

(4) Fuer は近代語の表現 au fur et à mesure に於て fur である。Fuer が後接語であるために, 次の語の母音に影響されて fur に縮約された。Cf. Bourciez, Phonét., § 66, Rem. III.

(5) *Sūfferit では q に唇歯音 f がつづき, 更に, *ōfferit とのアナロジーもあって *sūfferit が sōfferit に変わった。

(6) Sūeffre, trueve が近代語で各々 souffre, trouve になったのは, 語幹が無強勢の語形 (tropare など) とのアナロジーによる。Cf. Bourciez, Phonét., §66, Rem. III.

(7) 近代語 cercueil は seuil (近代語 seuil) < soliu とのアナロジーによる。Cf. Ibid., §66, Rem. I.

(8) Pōtūit では, 先ず, 子音につづく次末音節の無強勢母音 u が子音化し, -tui > *-twi > *-dwi となり, この段階で q の二重母音化が始まり, dw のグループが二重子音 ww になって *púowwet となる。次に, アクセントが移動し, puówwet (=pwówwet) の u [w] が o に同化吸収され, 二重子音が単純化されて pówet となる。その後, 7世紀の末, 語末の母音が脱落して pōut に至り, 更に, óu が q に縮合されて pot に至ると推定される: Pōtūit > *pōtwit > *pōdwit > *pōqwwet > *púqwwet > *puówwet (=pwówwet) > *pówwet > *pówet > pów(e)t > [pōut] > [pot].

なお, 近代語 put は二人称単数 poüs(peüs) や fut とのアナロジーである。Cf. Lanly, Fiches, pp. 275-6.

(9) Cf. Fouché, Phonét., pp. 175; Ibid., Vol. III, p. 551.

Mörte > mort 189, tōrtu > tort 193, fōrte > fort 269, tōstu > tost 399¹⁰⁾, vōstru > vostre 497¹¹⁾.

Jus 874 は *dēōsum (< dēōrsum) にさかのぼるが, jus の [ū] は意味上対立する関係にある *sūsum (< sūrsum) の影響によって現われた¹²⁾。

c) 開音O+Y

強勢の q のあとに yod がつづくときは, q が二重母音化し, úoi > úei となり, 中央の e が消失して úi となる。その後, 8 世紀頃, u が硬口蓋音化し, 12 世紀にはアクセントがより可聴度の高い i に移って, [úi] が [wí] となる。

*Inódiu > anui 57, nócte > nuit 144, *pōsseo > puis 258¹³⁾, pōsseat > puisse 256, inódi-iet > anuit 367.

しかし, löcu > leu 71, jōcu > geu 269 に於ては, c は二つの軟口蓋音の間にあって消失し, 異った音韻変化を経て [(y)œ] に至る¹⁴⁾。

強勢の q に l + yod がつづき, l が湿音となるときも, q は二重母音化する: *Vōlēo > vueil 363, dōleo > dueil 415¹⁵⁾。

Öc(u)los > ieus 308 では üe|s となってから, 子音の前の l が母音化し, üeus > üoe(u)s から ü が i に変わり, ioes > yoe となった。近代語の書法は yeux である¹⁶⁾。

d) 開音O+鼻子音

開音節の強勢母音 q も, 鼻子音によって二重母音化を阻まれることなく, úe の段階で, 第二要

(10) 近代語では s の前で (s が消失するときも保持される場合も) q は q に変化している。近代語の tót は [tɔ] である。

(11) Vōstru は名詞の前に用いられるか, 独立して用いられるかによって16世紀に異った語形が確立し, notre 814では q が保持されるが, nôtre では q となる。Cf. Fouché, Phonét., p. 428.

(12) Cf. Lanly, Fiches, p. 193: *Dēōsum > *dyōsu > *dyūsū > *džyūsū > *džūsū > džūs(o) > [džūs] > [(d)žūs].

(13) 中代フランス語期に, (je) puis は, pōtes > peux, *potet > peut とのアナロジーによって, peux の語形に置き換えられ, puis は疑問形 Puis-je ..? にのみ用いられることになった。

(14) この [k] は, 先ず, g に有声化し, 次に, 狭窄音となり, その後, w に唇音化して, 語末母音の消失後, 内破音の u としてとどまる。従って, löcu, jōcu は各々 *lūqu, *džūou となり, *lueu, *džūeu を経て, u の硬口蓋音化とアクセントの移動, 更に, e の唇音化によって [*lūwēu], [*džūwēu] となる。それから, w は u に対して異化作用を起こし, y に変わり *lyéu, *džyoe となる。džyoeu では, 更に, y が先行する口蓋音に吹収され, 語末の母音が脱落して, 各々12世紀には, 一般に, [lyœ], [žoe] に至ったと推定される。しかし, [lūwēu] の場合に u の異化作用が被異化音 w を消失させるまで進むと, [leu] となって leu の語形が生じた。Cf. Fouché, Phonét., p. 335.

(15) グループ ly は, 先ず, 子音 l の前に先入音として転移し, なお元の位置にもとどまって yly となる。e と q の自発的二重母音化以前のことである。しかし, 外破音の y は, 語末母音消失の後に, それにつづく母音の前で無音となる。一方, 内破音の y は, yod の作用による e と q の被制約的二重母音化の後に消失する。Cf. Fouché, Phonét., Vol. III, pp. 916-7; 本稿 3, c) 閉音E+y.

(16) Cf. Bourciez, Phonét., §70, Rem. I.

素 e が鼻音化し, $\acute{u}\tilde{e} > \tilde{w}\tilde{e}$ となる: $B\acute{o}nu > buen$ 797⁽¹⁷⁾.

q が鼻子音+子音によって拘束母音となるときは, q は, 先ず, 鼻子音によって q に狭められ, \tilde{q} に鼻音化し, 13世紀には \tilde{q} に開く。従って, 拘束母音 q の鼻音化は後に述べる拘束母音 q の鼻音化と全く同じ結果となる: $C\ddot{o}m(i)te > conte$ 76, $l\ddot{o}ngu > lonc$ 129.

なお, *domina* は母音 \tilde{i} が脱落して *domna* となったが, その後, 頭母音 o/a の交替があり, 10世紀に $mn > m$ の単純化によって $[d\ddot{a}m\epsilon]$ となり, 中代フランス語期に非鼻音化して $[dam]$ となる。

6. 閉音 O (古典ラテン語の \bar{o} と \ddot{u})

a) 自由母音の閉音 O

強勢の自由母音 \bar{o} は, $\bar{e} > \acute{e}\tilde{i}$ の二重母音化と同じ時期(7世紀の末)に $\acute{o}\tilde{u}$ となり, 第一要素 o が次第に \bar{e} に異化し, 12世紀末には $oe\tilde{u}$ は $\bar{e}\tilde{u}$ に縮合される。書法は *eu* である⁽¹⁾。

$Pr\ddot{o}do > preu$ 19, $h\ddot{o}ra > eure$ 24, $d\ddot{u}os > deus$ 78, $s\ddot{o}lu > seul$ 155.

この $\bar{e}\tilde{u}$ は絶対語末(或いは無音 \bar{e} の前)では, 今日まで保持されているが, 発音される子音の前では, 中代フランス語期に $\bar{e}\tilde{u}$ に開く: $[d\bar{e}\tilde{u}]/[s\bar{e}\tilde{u}l]$.

但し, 接尾辞 $-\ddot{o}su(-\ddot{o}sa)$ では, s の前で $\bar{e}\tilde{u}$ は $\bar{e}\tilde{u}$ に開くことがなかった。従って, $invi(di)-\ddot{o}su > envioux$ 201 の近代語 *envieux* は $[\ddot{a}vy\bar{e}\tilde{u}]$ である。

代名詞 *ill\ddot{o}rum* は, 無強勢の語形 (*illum*, *illam* など) とのアナロジーによって, 頭音節が省略されてから二重母音化して, 13世紀には *leur* となるが, テキストでは未だ *lor* 26 である。 $Seni\ddot{o}r > seignor$ 93⁽²⁾, $meli\ddot{o}re > meillor$ 886 の場合でも, 発音は書法に先行している。同様に, *amor* 6, *dolor* 17, *valor* 44, *honor* 64, *traitor* 124 などは各々 *am\ddot{o}re*, *dol\ddot{o}re*, *val\ddot{o}re*, *hon\ddot{o}re*, **tradit\ddot{o}re* に由来するが, 書法は未だ o にとどまっている。その後, *amor*⁽³⁾を除いて, 通

(17) *Buen* は *bonu* の強勢形に, *bon* はその無強勢形に由来する。*Buen* (*buon*) は名詞の前にあって語群を成し, おそらく, 次につづく強勢の語によって調音の力が移動したために **bwon* となり, *bon* に縮合されたのであろう。同様に, *h\ddot{o}mo* は不定代名詞的に用いられると, 無強勢となるので, *hom* 115 となるが, 強勢形であれば, *huen* である。Cf. Fouché, *Phonét.*, p. 161, pp. 354-5.

(1) 自由母音の閉音 \bar{o} は開音 \bar{e} とその音韻変化の過程を異にするが, 同じ結果に至る。奥舌面が上がり, 短音の \bar{o} は益々狭められ, ou に二重母音化する。この傾向が次第に強まる一方, 同時に, ou の o は u に同化される危険にさらされた。これに対して, o は次第に異化作用によって自らを守り, $\bar{e}\tilde{u}$ となり, 新しい二重母音 $\bar{e}\tilde{u}$ を生じた。Cf. Fouché, *Phonét.*, p. 305.

(2) ここでは, n のあとに *yod* がつづいて, n が1世紀頃, 口蓋化されてから, 5世紀頃, この *yod* が口蓋音の前に転移し, 強勢の \bar{o} が二重母音化して, 近代語では *seigneur* となる: $Seni\ddot{o}re > *seny\ddot{o}re > *se\tilde{i}n(y)\ddot{o}re > *se\tilde{i}n\ddot{o}ur > *se\tilde{i}n\bar{e}\tilde{u}r > *se(i)n\bar{e}\tilde{u}(u)r > [se\tilde{i}n\bar{e}\tilde{u}r] > [se\tilde{i}n\bar{e}\tilde{u}r]$. Cf. Lanly, *Fiches*, pp. 325-7.

(3) *Amor* が, その後, *ameur* に至らず, *amour* になったのは, 単に *amoureux* とのアナロジーによるのか, *Amors* 439 の如く, 個有名詞としての詩的な用法によって, 古い語形をとどめることになったのか, 或いは又, 接尾辞 $-\ddot{o}rem$ が $-\bar{e}\tilde{u}r$ に至らず, $-\bar{e}\tilde{u}r$ にとどまった南方フランス語の影響によるのか定かでない。Cf. Marcel Galliot, *Etudes d'ancien français*, Didier, 1967, p.147, pp. 269-70; Fouché, *Phonét.*, p. 307.

常の音韻変化に従って *douleur, valeur, honneur, traiteur* に至ったものと思われる。

後接的に用いられる語では、無強勢となるので、二重母音化は起こらない。o 或いは ou と綴られる。

(Ec)ce-hoc > ce 69, (il)lū > le 75⁽⁴⁾, vōs > vous 220, sūper > sor 335⁽⁵⁾, ūbi > ou 376⁽⁶⁾, *pōr > por 498⁽⁷⁾, (il)los > les 604⁽⁸⁾.

b) 拘束母音の閉音O

拘束母音の閉音 ɔ は12世紀まで変化せずに保持されたが、13世紀中に [u] に変わった。従って、テキストでは未だ二つの書法 o/ou が現われ、一定していない。

Diŕrnu > jor 24, cōrte > cort 47, *jūsta > joust 109, būcca > bouche 398, *tōttu > tout 420, *tōtta > toute 431, dúb(i)tāt > doute 563, túrb(u)lat > trouble 724, mō(n)-strat > moustre 869.

Aillors 50 の語源には定説がない。Aliŕsum の拘束母音からは近代語 *ailleurs* の二重母音 *eu* を説明できない。更に、Fouché は、このラテン語の語中の *rs* は *r* が *s* に同化して *ss* となることから、aliŕsum を *ailleurs* の語源とすることはできないとして、alius の比較級 aliōre(loco) が ɔ の二重母音化によって *alour となり、語末にいわゆる副詞の *s* が付されて、alours から *aill-eurs* に至るとしている⁽⁹⁾。

Fusse 192 は fuisse の *i* がアナロジーによってその *i* の音色を保持し、w + *i* が [ū] に至ったとすることもできるし、又 fuisse が *fosse となり、これが、語幹に -u- を持つ定過去に倣って、つくり替えられたと考えることもできる⁽¹⁰⁾。

閉音の ɔ が l + 子音によって拘束母音となるときは、l が u に母音化し、二重母音 ou を成し、13世紀中に ɔ が狭まり、uu から [u] に縮合される。しかし、書法では相変らず ou である。

Mūltu > mout 129, dūlce > dous 296, ūltra > outre 870.

c) 閉音O + Y

強勢の ɔ に子音を隔てて yod がつづくときは、yod が子音の前に転移して oi を成し、e の二重母音化に由来する oi と混同され、同様の音韻変化をたどる(本稿 3, a) 自由母音の閉音 E 参照)。従って、13世紀には [we] となる。

(4) (Ec)ce-hōc > ɔo, (il)lū > lo が各々12世紀の初めに ce, le に弱音化した。

(5) Sūper からは前置詞 *seur* 333 も現われるが、この語形が sūsu > sus 522 の影響をうけて *sur* となった。Cf. Bourciez, Phonét., § 72, Rem. III.

(6) Vous, ou の書法 ou は二重母音化の ou とは全く関係ない。強勢の o は、語頭の ɔ と同様に、13世紀に ou [u] となる。Cf. 本稿 6, b) 拘束母音の閉音 O。

(7) Por も近代語では *pour* である。

(8) (Il)los > *los が les に弱音化したものであるが、les は前述の ce, le より早い時期に現われる。Cf. Bourciez, Phonét., § 72, Rem. III.

(9) Cf. Fouché, Phonét., p. 232.

(10) Cf. Fouché, Le verbe fr., p. 423.

Angüstia > angoisse 303¹¹, *conōscēre > (re)cconnoistre 314¹², vōce > voiz 422¹³, *con-
osco > connois 802¹⁴.

俗間にあっては、この [wɛ] はすでに13世紀から [wa] となり、近代語 angoisse, voix の発音となった。一方、これとは別に、1300年頃パリ市民の間に広まっていた [wɛ] を [ɛ] と発音する傾向は、現代語に至っても, connaître, connais などにもその変遷の跡をとどめている。

Totti(< toti) > tuit 61¹⁵ では語末の i の遠隔同化によって, ōstium > uis 473¹⁶, cōgitat > cuide 648¹⁷ では ō につづく yod の影響によって、各々 ō が ū に狭まり、ū + yod となり、q + yod の場合と同様に、u の硬口蓋音化の後、12世紀にアクセントが可聴度の高い i に移って、[úi] が [wí] となる。

*Conōvūit > connu 422 ではアナロジーによって ō が ū に狭められた¹⁸。

強勢の ū に長母音 ī がつづくときも、この ī との接触によって、ū はその音色を保ち、前述の ū + yod と同様の音韻変化をたどる。

(11) Cf. Angüstia > *angossya > *angoiss(y)a.

(12) Fouché は、k が先行する s と同化して調音点を前方に移動し、その結果生じる硬口蓋の閉鎖音 [ɛ] が yod に変わるとしている (Cf. Phonét., Vol. III, p. 816.) が、Lanly は、語頭の或いは子音につづく語中の k + e, i の一般的な口蓋化、つまり、ky > kɣ > tɣ > tsɣ > ts(y) > ts > s によっても説明できるとする (Cf. Fiches, pp. 126-7)。いずれにしても、この yod が s 或いは ss の前に転移して、o と二重母音を形成し、その後、次末音節の弱母音 ɛ が消失して、t が語中音として添加された：*Conōscēre > *conōscēre > *conōsyere > *conōysere > *conōys're > [konoistre] > [kōnɔ(s)trɛ] > [kōnwɛ(s)trɛ] [konɛtr(e)] / *conōskere > *conoskere > *conoskyere > *conostyere > *conostsyere > *conotsyere > *conossyere > *conqys(y)ere > *conoiss(ɛ)re > [konoistre].

(13) Vōce では、k が母音間にあって口蓋化して tɣ となり、dzy に有声化してから、yod が口蓋音の前に転移して ydzy となり、再び yts に無声化して、13世紀には ts の t が脱落し、s も無音化する：Vōce > *votɣye > *vodɣye > *vojdɣ(y)e > [vwɛs] > [vwa].

(14) *Conōsco に関しては、c + i とのアナロジーによって、c + o から現われる yod が s の前に転移して、*conoiss(y)o (Cf. Fouché, Phonét., p. 283) となるとする説と sc が軟口蓋音 o の前で入れ替わり、cs の c が歯擦音の前で yod に変化したと推定する (Cf. Bourciez, Phonét., §136, Rem II.) 説が対立している。

(15) 語末の i は tutti homines や tutti *ant (=habent) などの連辞に於て、y に子音化して tutty となり、この y が tt の前に転移して tuit となった：Tōtti > *tūtti > *tutty > túit > [túit] > [tūit]. 但し、この語形は中代フランス語期に姿を消す。Cf. Fouché, Phonét., p. 398.

(16) Ōstium は yod の影響で *ūstium となり (Cf. Ibid., pp. 416-7), yod が t を湿音化して、t から硬口蓋音の ɣ が生じる：tɣ > tɣ > tsɣ. その後、yod が -stɣ- の前に転移し *ūistɣy となる。やがて、子音群 -stɣ- の t は、それを囲む s に同化して -ss- となり、外破音の y が先行する ss に吸収され、ss は s に単純化される：*Ūstium > *ustɣy > *ūistɣy > *ūissɣy > *ūissyo > *ūissɣ(y)o > *ūisso > *ūiss-(o) > *ūis > [ūis] > [wís]. Cf. Lanly, Fiches, pp. 191-2.

(17) Cōgitat は、ラテン語の話言葉では、*cōyyītat である。グループ yy の影響で ō が ū に狭められた (Cf. Fouché, Phonét., p. 415)：Cōgitat > *cōyyītat > *cūyyītat > *cūyītat > *cu(y)idat > *cūidɛt > [kūidɛ] > [küidɛ] > [kwidɛ] > [kwid(ə)] Cf. Ibid., p. 138.

(18) Connu は語末に t が欠如しているが、定過去の三人称単数であり、*conōvūit にさかのぼる。母音接続の ū が w に子音化してから、*conowwit は、語末の i の遠隔同化によって、ō が ū に狭められた一人称単数 *conōwwī > conūwwī とのアナロジーによって、*conuwwet となった：*Conōvuit > *conōww-it > *conūwwet > *conūw(e)t > [konút] > [kōnūt] > [konū] Cf. Ibid., p. 129.

*Ecce-illūi > celui 151, cūi > cui 739, *illui > lui 815⁽¹⁹⁾.

なお, *fut > fu 41, *furunt > furent 433 は, 各々語末の i との接触或いは遠隔同化によって, u の音色が保たれた一・二人称単数 fūi > fui, *fūsti > fū(s) とのアナロジーによる語形である。

動詞 estre の一人称単数 sui 78 は, sūm が habeo > *ayo に影響されて *suyo となる。u はそのあとにつづく yod のために o に開くことなく, [sūi] > [sūi] となり, 語末に puis(< *possio) の s を加えて近代語に至る⁽²⁰⁾。

Dūcem > duc 45 は借用語である。

d) 閉音O+鼻子音

開音節の強勢母音 o に鼻子音がつづくときは, 二重母音化 ou の段階で, 10世紀の中頃, 先ず, 第二要素が鼻音化して oū となる。次に, 第一要素も鼻音化し, ōū は12世紀の後半, ǫ に縮合され, 13世紀には ȝ に開く。

Ratiōne > reson 59⁽²¹⁾, *traditiōne > traison 96, cantiōne > chançon 294, dōnat > done 439.

しかし, フランス語に於て, 鼻子音が外破音となるとき (m,n+e の場合) は, ȝ は中代フランス語期に非鼻音化し, 鼻子音の音韻上の脱落はない: Done [dōn] > [dɔn]。

強勢の ȝ が鼻子音+子音によって拘束母音となるときは, ȝ は二重母音化せず, 開音節の ȝ とほとんど同じ時期, 12世紀後半に鼻音化し, 13世紀には ȝ に開く。

Sūnt > sont 118, ūnquam > onque(s) 131, *mentiōnica > mençonge 595, mundum > mont 691, *fellones > felons 957.

否定辞 nōn は, 強勢形では, non 116 として ȝ が保持されるが, 無強勢形では, nen に弱まり, やがて, ne 120 に縮約された⁽²²⁾。

強勢の ȝ は, そのあとに yod によって湿音化された外破音の ŋ がつづくときは, ŋ の前に転移する yod がこの口蓋音 ŋ に融合して消え, ȝ が ȝ に鼻音化し, その後, ȝ に開く。書法 oing は消失した yod と湿音 ŋ を示している: Verēcūndia > vergoigne 17, Būrgūndia > Borgoin-gne 18.

その後更に, ȝ は鼻音性を失い, 近代語では vergogne [vergɔŋ], Bourgogne [burgɔŋ] である。

強勢の ȝ は, それにつづく ŋ が子音 (或いは語末の ŋ) の前では, ŋ の屈折から生じる i と二重母音 oi を成し, 10世紀の中頃, ōi となる。そして, 12世紀の中頃にはアクセントが移動し,

(19) Autre の被制格単数の強勢形 autrui 958 は, これらの語形とのアナロジーによってつくられた語である。

(20) Cf. Bourciez, Phonét., §75, Rem. III.

(21) Ratiōne > *raydzyōne > *rajdz(y)ōne > *rejdzōūn > rē(i)dzōūn > rēzōn > [rēzȝ]. Cf. Lanly, Fiches, p. 297; 拙論「古フランス語音韻試論」母音 I, B, 語頭の A, e), 注(10)。

(22) Cf. Bourciez, Phonét., §77, Rem. II.

o^éを経て w^é となり、その後、17世紀頃までに w^é に開く²³。なお、湿音 ŋ は7世紀の末頃までに非口蓋化して n となる：Cōgnītus > cointes 43, pūctū > point 197²⁴。

7. U (古典ラテン語の ū)

強勢の ū は、自由母音でも拘束母音でも、そのまま保持され、8世紀に調音点が後方から前方へ移動し、軟口蓋音 [u] から硬口蓋音 [ɥ] に変わる。

Salūte > salut 398, dūrat > dure 450⁽¹⁾, adventūra > aventure 544, exūta > issue 655, mē(n)sūra > mesure 884, nūda > nue 920.

過去分詞の語尾 -ūtū, -ūta にこの音韻の変化が見られる。

*Decipūtū > deceū 159, *credūtū > creū 160, *sapūtū > seū 329, *tenūtū > tenu 430, *movūtū > meū 508, *tacūtū > teū 657, *vidūtū > veū 658, *perdūtū > perdu 815, *defendūtū > desfendu 948.

Nūllus では二重子音 ll が単子音化し、語末の母音が脱落して *nuls となる。その後、子音の前にある l が u に母音化し、*nuus がたちまち *nus に縮約されてから、u が硬口蓋音化して、nus [nüs] 119 となった。

Adjūtet > aīt 773 の場合は、母音間の dy が、yod の同化作用によって、dy > yy > y と変化し⁽²⁾、強勢の ū は、先行する yod の影響をうけて、非唇音化して i となり、yod を吸収する⁽³⁾。

強勢の ū に鼻子音がつづくときも、ū は ũ に硬口蓋音化する。

Ūna > une 1, *al(i)cūnus > aucuns 5, ūnu > un 34.

その後、14世紀頃、ū は ũ に鼻音化し、n が語末となるか、n のあとに更に他の子音がつづくときは、16世紀の中頃、œ となり、その後、œ に開く。しかし、n, m + e の前では ũ は œ に開くことなく、14世紀末に ũ に非鼻音化する⁽⁴⁾。

(23) Cf. Fouché, Phonét., p. 378.

(24) Cf. Lanly, Fiches, pp. 263-4 : Pūctū > *pūnctū > *pōnto > *pōint(o) > *pōint > [pōint] > [pwēn(t)] > [pwē].

(1) Durārer > durer 290 の語頭の母音はこの dūrat の如き強語幹の語形の影響をうけた。

(2) Cf. Fouché, Phonét., Vol. III, p. 909.

(3) Cf. [adyūtet] > *ayūtet > *ayūt > *ayit > [ait].

(4) Cf. Fouché, Phonét., pp. 362, 372, 384.

8. 二重母音AU

強勢の *au* は、自由母音でも拘束母音でも、*q* に統合される⁽¹⁾。但し、絶対語末と母音接続の *ę* の前では *q* は11世紀から *q̇* に狭められ、11世紀末か12世紀の初めには [u] に変わる。

Láudo > *lo* 70, **aura* > *ore* 84⁽²⁾, *causa* > *chose* 122, *aussat* > *ose* 314, **paraula* > *parole* 403⁽³⁾, *claudit* > *clot* 473, *claudēre* > *clorre* 477, *laudat* > *loe* 487.

従って、*chose*, *ore*, *ose*, *parole*, *clot*, *clorre* では [q̇] であり、*lo*, *loe* では [q̇] > [u] となり、12世紀から *q̇/q̇* の対立が *q̇/u* の対立へと移行した。更に、短音 *q̇* は13世紀に [z] (或いは [v]) の前で長音となり *q̇* に狭まる: *Qse*, *chōse*.

Tropaut (< *tropavit*) が *trova* 382 となったのは、この動詞の他の人称の語形とのアナロジーや、他の動詞の影響による⁽⁴⁾。

子音の前の *l* が11世紀の末頃までに母音化すると、この *u* と先行する強勢の *a* との結合から形成されるフランス語の *au* は、数世紀遅れてラテン語の *au* と同様の過程を経て、*q̇* に至り、やがて、*q̇* に狭まる⁽⁵⁾。

Alteru > *autre* 13, **fallita* > *faute* 321, **fallit* > *faut* 745, *assaltu* > *assaut* 956, *falsus* > *faus* 957.

二重母音 *au* に *yod* がつづくときは、両者の結合が *qi* を形成し、これが、強勢の閉音 *ę* の二重母音化から生じる *qi* と同様の音韻変化を経て、13世紀には [wę] となる (本稿 3, a) 自由母音の閉音 E 参照)。

(1) 二重母音 *au* は、先ず、第一要素が開口度に関して第二要素を同化し、*áq* となり、次に唇音 *o* が *a* を唇音化する。その後、*áq* の *a* は *q̇* に同化吸収される: *au* > **aq̇* > **âq̇* > *q̇*. Fouché によれば6世紀以前のことである。Cf. Phonét., p. 297, Rem. III; 拙論「古フランス語音韻試論」, 母音 I, B, 3, 語頭のAU。

(2) *Ore* は指示詞に強勢のある *hác hōra* にさかのぼる。*Hōra* の *ō* は、その第二アクセントを失い、短母音 *o* となる。その後、**ágōra* が **áōra* に移行し、弱母音 *o* が次第に狭められて **aura* となり、*ore* に至ったものと推定される。Cf. Ibid., p. 166. *Illá hōra* > *lors* 359 の場合も同様である。

(3) Fouché は、古典ラテン語 *parabola* の母音間の *-b-* は、狭窄音 *-β-* から両唇音 *-v-* に変わった後、唇軟口蓋母音の前で *-w-* に弱音化し無音化すると推定する (**parábola* > **paraula*. Cf. Fouché, Phonét., Vol. III, p. 619.) が、G. Raynaud de Lage の如く *parabola* > **parabla* > **paraula* とし、次末音節の無強勢母音の脱落によって *paraula* を説明することもできる (Cf. Manuel pratique d'ancien français, Picard, 1968, p. 106.)。

(4) *Tropaut* は音韻論的には *trovo* > *trovo* から、近代語では *trouvou* となるはずであったが、初めから *trova* となったのは、*a* < **at* < *habet*, *as* < **aes* < *habes*, *avez* < *abētis* × *atis* の影響や、*ai* < **ayyo* < *habeo*, *as* < **aes* < *habes* と *trovai* < *tropai* < *tropavi*, *trovas* < *tropasti* との釣合に準ずるものである: *Ploravit* > *ploraut* > (re) *plora* 630, *inviavit* > *inviaut* > *envoia* 685. Cf. Fouché, Phonét., p. 297, Rem. II.

(5) Cf. Ibid., pp. 299-300.

Gaudia > joie 9, pauci > poi 55⁽⁶⁾, audiat > oie 437.

強勢の au+鼻子音に更に子音がつづくと, au > q は鼻子音との接触によって ɔ に狭まり, ɔ̃ に鼻音化してから, やがて, ɔ̃ に開く: *Faunt > font 8, *aunt > ont 719⁽⁷⁾.

(6) Poi は古フランス語では, 中性単数として <<peu>> の意味で用いられるが, ラテン語で常用された男性複数形 pauci を基点として説明される (Cf. Ibid., p. 310; Lanly, Fiches, p.252.). Pauci の k は i の前にあって破擦音 k̥y > t̥y > tsy > dzy となるはずであった。しかし, paucu > *pqwo とのアナロジーによって, 6世紀頃, powi となったと推定される。唇口蓋子音wは軟口蓋母音óとiの間にあって無音化し, p̥oi の語形を成した。その後, q は ɔ に狭まり [p̥oi] となる。なお, páucu > *pqwo は *pow(o) から [póu] > [p̥œu] > [p̥œ] と変化して, peu と綴られる。

(7) *Facunt < faciunt, *habũnt < habent × sunt の母音間の c, b が脱落して, 語末音節の u が先行する a と二重母音 au を成した。